

課題の3

春植エタマネギの無マルチ栽培における除草体系調査（継続）

転作田等でタマネギを大規模で栽培するには機械定植が必須となり、そのためには無マルチで栽培する必要がある。無マルチ栽培で課題となるのは、雑草対策である。

そこで、除草剤使用による除草体系の確立に向けて、除草剤の組み合わせによる比較試験を行い、今後の栽培普及の資料とする。

1 調査内容

- (1) 栽培環境 露地ほ場
- (2) 供試品種 マルソー（カネコ種苗）：早生
- (3) 調査方法 下表のとおり 4 種類の除草剤の組み合わせにより 2 つの調査区を設け、雑草の発生状況を調査

区名	回数	散布日	除草剤名
調査区 A	1 回目	4 月 21 日	ゴーゴーサン乳剤（ペンディメタリン 30%）
	2 回目	5 月 30 日	ボクサー（プロスルホカルブ 78.4%）
調査区 B	1 回目	4 月 21 日	モーティブ乳剤（ジメテナミド P19.7%、ペンディメタリン 23.1%）
	2 回目	5 月 30 日	ボクサー（プロスルホカルブ 78.4%）

(4) 耕種概要

- ①播種日：2月16日 200穴セルトレー
- ②定植日：4月16日
- ③栽植様式：畝幅 190cm（床幅 90cm） 株間 12cm 条間 24cm 4条植え
栽植株数 17,544本/10a
- ④施肥量

区分	肥料名（N-P-K%）	施肥量（成分量 kg/10a）		
		窒素 N	リン酸 P	加里 K
対照区	燐硝安加里 1号 S552（15-15-12）	15.0	15.0	12.0

- ⑤収穫日：7月26日

2 調査結果

1 回目の除草剤散布以降、約 2 週間おきに調査した雑草の発生状況は表 1 のとおりである。B 区では、定植後 44 日目までの期間において A 区よりも雑草の発生が抑制された。

44 日以降はタマネギの生育が進み、雑草の目視確認が困難となったことから、雑草の発生箇所数を計測することができなかったが、定植 57 日目の写真で確認する限りでは、B 区の方が雑草の発生が抑制されている。

表1 畝 1m 当たりの雑草の発生確認箇所数

定植後日数 区名：雑草の種類	16日目 [5/7]	30日目 [5/21]	44日目 [6/4]
A区：広葉	0.54	0.92	1.69
A区：イネ科	2.85	16.85	26.08
A区合計	3.39	17.77	27.77
B区：広葉	0.08	0.54	1.92
B区：イネ科	2.92	7.54	10.92
B区合計	3.00	8.08	12.84

図1 雑草の発生状況

①定植 29日目 (5月21日)



②定植 57日目 (6月20日)



③収穫後 (7月26日)



4 まとめ

今年度は、昨年度と同様に B 区の方が A 区よりも定植後 44 日までの雑草発生箇所数が少なかった。

A 区よりも B 区の方が雑草の発生箇所数が少なかった理由としては、A 区に使用したゴーゴーサン乳剤に含まれる除草成分が 1 成分であるのに対し、B 区に使用したモーティブ乳剤には除草成分が 2 成分入っていることから、B 区の方が雑草の発生がより抑制されたためであると思われる。

継続的な調査により同様の結果が得られたため、今年度をもって調査を終了する。